

2020 年度 自己評価結果

認定こども園 西那須野幼稚園

本園では、教職員に対してチェック方式による自己評価を実施しております。
認定こども園への移行に伴い、2019 年度より自己評価の結果を公表いたします。

・評価は3段階評価 [達成されている、概ね達成されている、取り組みが不十分]

評価項目	自己評価	取り組み内容
教育理念や方針の理解 環境構成 教育課程の編成 評価と反省	達成	保育日誌・カリキュラム等 園の理念・方針確認 遊びこむ環境構成 子どものアイデアを遊びに採用
健康と安全への配慮 幼児のみとりと理解 指導とかかわり 保育者同士の協力・連携	達成	全体で視診を強化 年齢に沿った見守り 毎日のミーティング(集団) 災害への備え・訓練 挨拶(職員・子ども) 園庭・遊具チェック
教師としての能力や適性 良識とマナー 保育の楽しみ・喜び 感性・周りへのアンテナ	達成	専門誌の回覧 成功の責任追及 周囲への感謝・労い 園用品管理の徹底 業務効率化の意識
保護者支援 情報の発信と受信 守秘義務の遵守 クレームへの対応	達成	個別面談 各種おたより 守秘義務意識の徹底 送迎時の声かけ
地域の自然 地域とのかかわり 小学校との連携	概ね達成	子育て支援 園庭解放
研修・研究への意欲や態度 専門性に関する研修・研究 遊具や教材に関する研修・研究 園の環境に関する研修・研究 自らを高めるための学習	概ね達成	各種研修(園内、オンライン含む) 研修報告 除菌・消毒 感染症、アレルギー情報



- 障がいのある子と一緒に生活をしていく中で子ども同士のトラブルもあるが、職員が仲介し、その都度話をするなどして遊びが展開できるようにした。
- 12月～3月の間、児童発達支援センターシャロームにて1名ずつ研修を実施し、障がいのある子の放課後預かりの現状や必要性について学んだ。
- 担当の係が教材等をきちんと管理できるよう工夫したことで、使いやすくなった。
- 行事の後で職員1人ずつ反省を出し、次につながるよう心がけた。
- 今後、遊具の使用についてのルールをまとめ、安全な使い方を伝えていきたい。
- 3学期、保護者支援検討会を開催。職員間で理解を深め、引き続き継続していく。
- 遊びの工夫
 - ・トランプやカードゲームを用意しておき、自然に遊べる環境設定をした。
 - ・鉛筆を使って絵を描きたいという子が増えたので、鉛筆コーナーを作った。
 - ・絵本の他に事典や児童書に興味がある子が多く、本を読むコーナーを作った。
 - ・イスに座って読むというルールを決めたことで、丁寧に本を扱うことができた。
- コロナ禍での保育・教育について
 - ・自由にできないこともある中、限られた環境の中でも保育を工夫した。
 - ・他クラス・学年の先生とコミュニケーションをとり、情報交換するようにし、連携の大切さを感じた。
 - ・事務教諭や看護師の協力も含め、みんなで子どもたちを見守った。
 - ・行事を安全に実施するため、限定のライブ配信などを実施し、保護者に見ていただく機会をつくることができた。
 - ・保育の進め方について何が大切かを皆で相談し、内容を検討した。
 - ・給食やおやつのはきは、テーブルの上に仕切りなどを設置した。
 - ・黙食や手洗いの習慣が身についたこともあり、風邪をひく子は少なかった。
 - ・保護者に登園前の検温を依頼し、体調を確認した。今後も続けていきたい。
 - ・外出が制限されて体を動かす機会が減ったためか、家庭での骨折や園生活でのケガが多かった。予防対策を会議で検討し、ジョギングやジャンプや体操などを多く取り入れた。朝の自由参加マラソンは、喜んで参加する子が多く見られて良かった。





この1年間は、新型コロナウイルス感染対策で、保育上の制約はあったが、保育を原点から見直す好機となった。

また、このコロナ禍により、子ども達が将来生きるであろう正解のない時代が、世界の現実となった。この1年間の私たちの自己評価による課題が、ある意味において子どもたちの将来に直結する課題でもあることを再認識し、自己評価についての研鑽を深め「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 自己評価実践園」認証を受けた。

私たちが直面しているように、子ども達はその時々々の適解を探求して生き、非認知能力と言われる折れない心(レジリエンス)、自己統制力(意思・感情・行動)、価値観の違う人と一緒にやり遂げる力等が求められる。この非認知能力の基礎が幼児期の遊びや他者との関係性を通して育まれると言われている。私たちは自己評価に基づく更なる保育の質的向上を目指したいと考える。同時に、建学の精神に基づく、他者の心の痛みを感じて共に生きる力を身につけることをも念頭に置き、次年度目標の両輪として掲げたい。

次に自己評価で得られた項目からの課題目標について触れたい。「地域の自然や社会とのかかわり」の項目については概ね達成されているが、コロナ禍での地域社会との関わりを再構築しながらコミュニティ・インクルージョンを図りたい。また、自然との関わりにおいては、放射能汚染でこの10年間利用出来なかった山林観察園の放射線量が、除染により下がったので、活用していきたい。「研究と研修について」も概ね達成されているが、認定こども園になってから、子どもだけでなく親も含めた重層的支援が増えている。教師が、カウンセリングや福祉的な学びの研修を通して課題解決型の支援力を高めること。事例を通して他機関と連携した伴走型支援で、結果的に主な課題の軽減をするということも深めたい。

最後に、昨年はワールド人形を各クラス2体備えたが、子どもの多様性を大切にしたい保育の課題について深めたい。





自己評価結果から、先生方の積極的に学ぶ姿勢が感じられました。時間の限られたパート勤務の先生も、今後リモート研修が定着化すれば受講できると聞き、素晴らしいことだと思いました。勤務形態にかかわらず、すべての職員がこの園にとって大切な存在です。これまで育児などによる離職は大きな問題でしたが、育児休業などを経て長く勤める先生が増えたと聞いています。我が子を持つことでひと味違った見方ができたり、親になって初めてわかることも多いでしょう。それが再び保育に活かされるのは頼もしいことです。

今年度はコロナの影響などで来園回数が減ったものの、毎週発行の「しらゆり」を読むことで、園のことを知ることができました。らくりん座による絵本の読み聞かせなどは、子どもの心の成長にとっても良い試みだと思います。また、本の傾け方や間のとり方など、プロの劇団による読み聞かせは、保育者側も参考になっていると思います。コロナ禍で劇団の仕事が減り、何か協力できないかというところから実施に至ったと伺いましたが、これからも地域における役割を考え、人とのつながりを大切にし、この園を通して地域全体で子ども達を見守っていただきたいと思っています。昔と比べて家庭の在り方も多様化しました。子育て支援は今後ますます重要な課題となるでしょう。

保護者の変化やコロナウイルス対応など、保育が揺らぎそうな状況だからこそ毎週の「しらゆり」を保護者だけではなく、ぜひ職員の方も読み込んでもらいたいと考えます。園としての方針や思いがここに記されていると感じました。

